

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

■「3か年計画が始まります」	1
■地球の木講座「カタツムリの知恵と脱成長」	2～3
■ネパール教育プログラム「支援地域はIRM全区に」	4
■インフォメーション/活動日誌	4
■ネパール極西部訪問報告書ができました！	4
■事務局が移転します	4

「3か年計画が始まります」

豊かで幸福な社会は誰かが与えてくれるものではない

どんな組織でも、うまくいっている時もあればそうではない時もあります。うまくいっている時には、なんでウチの組織はうまくいっているのだろうと考えることはあまりないかと思いますが、そうではない時は、どうしてだろう、どうしたらよいだろうと考えます。私が地球の木の理事になった8年前も、担い手や会員の高齢化が課題としてあげられ、そして数年前からは財政的な問題も表面化してきました。設立当時は、飢餓に苦しむ途上国にランチ1食分のカンパで支援しようと言っていた私たち。消費から生活や社会を見直す社会運動として、会員数は現在の6倍の会員を有し、活動をしてまいりました。

私たちを取り巻く社会背景は大きく変化しています。現在の国際社会の混沌とした課題は様々な視点で語られていますが、私は、近代市民社会の理念である＜公共＞という概念がゆらいでいるという点を重視します。＜公共＞をつくる、市民自らが自治する領域を広げる市民活動は改めて大切にしたいと考えます。豊かで幸福な社会は誰かが与えてくれるものではない、市民自らが作っていくものだという信念で、地球の木は国際協力というテーマに市民主体の公共圏をひろげる運動の一翼を担っていると自負してきました。しかし年月を重ねるうちに、内向きで自己満足的な状況になっていたのではないかという反省があります。私たちは、市民による＜公共＞をひろげる活動を止めるわけにはいかない、これから具体的に何をしていくか、何に取り組んでいくか、今、考えなければということで、3か年計画を検討しました。

課題を整理します。①会員の減少、活動チームメンバーの固定化。このことが新しく参加しようとする人たちの参加ハードルを高くしているのではないか。②資金。会費や寄付、交易販売等の減収。③事業全体として。地球の木の活

動スタイルがチームごとになっていることから個々の活動が共有されにくく、地球の木全体としての活動や目指すものが見えにくい。ビジョン達成に近づくためにも全体としての活動構築、その為の意見形成が不足していると考えました。

組織基盤である会員数を増やすためにも、地球の木への参加者が意見を言いやすい組織づくりを行います。具体的な活動をつくること、多様な人々が尊重される包括的な社会をつくるために地球の木ができることはなにか、これまでの自立支援活動の経験も踏まえて、具体的な活動や事業を創出していくことが必要です。そのためには地域で活動する様々な団体との連携も行います。国籍や民族、年齢や性別などに関係なく認め合い、排除しない社会に必要なアクションを考えます。

3か年計画というと作ることが目的化されるケースがままありますが、今回は計画をスタートラインに乗せ、実行していきます。皆様の活動への積極的なご参加とご意見をいただきたくお願いいたします。

(3か年計画検討チーム 大嶋朝香)



第11回通常理事会(5/11 事務所にて)

カタツムリの知恵と脱成長 ～豊かさで幸福を問い直す～

2025年3月22日(土) 青少年交流・活動支援スペース(ぴおシティ6階)

〔講師〕中野佳裕さん(立教大学社会デザイン研究科特任准教授)



— カタツムリの知恵とは？ —

ヨーロッパでは、カタツムリはバランスの象徴。カラの渦巻きがちょうど4回転半した所で成長を止めます。それ以上大きくなると身動きがとれなくなるからです。

世界はこれからどういう方向に向かって行くのでしょうか。近年日本でも未来を語る時、「脱成長」という言葉が聞かれるようになりました。今回の地球の木講座では、この「脱成長」を取り上げました。

『スイミー』で知られる絵本作家レオ＝レオニの作品『せかい いち おおきなうち』。「おおきなうち」を欲しがって手に入れたカタツムリが食べ過ぎて動けなくなり消えてしまうという寓話を「知恵」として伝承していくお話です。この作品にインスピレーションを受けた講師の中野さんは、「この世界の存在そのものがもつ豊かさを、経済至上主義の単一的思考から解放たねばならない」と言っています。難しい主題ながら、この先の時代について、みんなで考える講座となりました。

中野佳裕さんプロフィール



Ph.D. (英国サセックス大学)。著書に『カタツムリの知恵と脱成長―貧しさと豊かさについての変奏曲』(コモンズ、2017年)、訳書にセルジュ・ラトゥーシュ著『脱成長と食と幸福』(白水社、2024年)等多数。

「持続可能な開発」を問う

〈消費社会が世界に広がり環境が悪化した20世紀後半〉

国連ができたのは1945年。ちょうどその頃アメリカの経済学者が国内総生産GDPの計算方法を発明し、GDPの規模で社会の進歩、発展を計るという考え方が世界中に広まりました。そしてその頃、世界の国々に先駆けてアメリカが突入していた大量生産・大量消費の社会、そこに達することこそが社会が発展したことになるのだという考えが広まっています。

ところが1970年代になると様々な限界が生じてきます。ひとつは社会的限界。1人当たりのGDPが増加しているのに一人ひとりの幸福度は低下していく。不平等の拡大やコミュニティの社会関係の貧困が目立ってきます。もうひとつは生態学的限界。先進国各地で公害という形で起こった環境汚染が、だんだん地球規模のものになっていく。そして1980年代には地球温暖化、気候変動、生物多様性の喪失へと広がっていききました。ハッピー・プラネット・インデックスという指標を見るとよく分かります。この指標は、各国の豊かさをGDPではなく、①平均寿命 ②エコロジカル・フットプリント* ③生活満足度、の三つで測る画期的なものです。経済的に豊かになったが生活満足度は低下するという傾向が一番に現れたのはアメリカでした。ちなみにアメリカの満足度のピークは1956年だったということです。

* 地球環境への負荷を利用可能な土地面積の割合で示したもの

〈国連の「持続可能な開発」を検証する〉

国際社会の多くの政策関係者が、これまでの経済成長型のモデルは持続可能ではないとすでに気がついていいる中、1992年の第1回地球サミット(リオデジャネイロ)で、国連の開発政策のスローガンとして「持続可能な開発」が取り上げられます。そしてその後の国連サミットも、環境よりも経済を優先させて議論するという方向へ進んでいきました。

それはなぜなのか？国連が掲げる「持続可能な開発」の定義をよく読むと、後の方でこう言っています。「持続可能な開発というのは我々の経済活動にリミットを設けるものだが、それは絶対的なリミットではない。技術や社会組織が改善されたら、新技術を使って更なる経済成長を実現できる」と。

国連の開発政策については、持続可能性をめぐる二つの解釈が生まれています。「強い持続可能性」と「弱い持続可能性」。前者は、消費主義的モデルから抜け出し、地球生態系と調和するためにシステムチェンジをめざすもの。後者は経済成長の持続性、すなわち市場経済と技術革新を重視するもの。多国籍企業や先進諸国の政府はこの「弱い持続可能性」をサポートします。そして国連の「持続可能な開発」の議論の中では、弱い持続可能性が主流となっています。例えば1990年代から2000年代にかけて世界銀行などは、持続可能な開発の名の下で、途上国の市場経済化を推進してきました。

脱成長運動のはじまり

1970年代のフランスに現れた二つの社会運動（エコロジー運動と文化運動）が融合する形で脱成長運動が現れてきます。それを広めたのがフランスの経済学者で哲学者のセルジュ・ラトゥーシュ（1940年生まれ）。2002年パリのユネスコ本部で開催された国際会議「開発を解体し世界を再生する」でラトゥーシュは、地球規模での環境破壊と不平等の拡大に歯止めをかけ、公正なグローバル社会を実現させる道筋として、先進工業国の「脱成長」を提案します。「地球を救い、子どもたちに真つ当な未来を残すためには、社会が進む方向を変えなければならない。私たちが今乗っている電車の、速度を緩めたり止めたりしてもだめ。降りて、違う方向に向かう電車に乗り換えねばならない」と訴えました。

ヨーロッパの各地の様々な草の根運動、それらをネットワーク化して声を大きくしていく、その戦略として「脱成長」が広まっていきました。フランス、イタリアでは、脱成長をスローガンにする地方政党が生まれ、欧州議会でも「脱成長」が議論されるようになっていきます。2008年には「脱成長国際会議」がパリで開かれ、社会運動から始まった「脱成長」の学術研究が英語圏でも行われるようになりました。

ヨーロッパの脱成長運動に使われているロゴ

イタリアのロゴ



カタツムリの殻に地球儀が描かれている。

フランスのロゴ



商品は少なく、関係は豊かに。

講師スライドより

脱成長は何をめざすのか

「脱成長」は景気後退やマイナス成長を意味しているのではない。生活の質や空気や水など、経済成長が破壊してきた多くのものを回復させ、再生していくことをめざしているのだと、ラトゥーシュは言っています。大量生産・大量消費の社会に対して限度の感覚を再発見していく。持続可能な社会を作るた

めに何を減らし、何を増やしていくのか。環境や社会にかける負荷を減らし、生活の質を高めるものを増やしていくにはどうすればいいのか。公共の議論でキチンと話して政策に結び付けていこう、「脱成長」にはそういう狙いがあります。そのためには私たちの発想自体を変えなければならない。経済成長信仰・GDP信仰から抜け出すことです。豊かさの転換を目指し、私たちの想像力を転換させることが大切だとラトゥーシュは言い、カタツムリの知恵に学ぼうというのです。

そうすると、途上国との関係も変わってきます。先進国が経済のローカル化を進め、グローバルな消費社会から抜け出すことで、途上国も自分たちの社会の自立のために資源や労働力を使うことができます。先進国の今の豊かさは途上国の資源を利用することで発展してきたのですから。「まず先進国が変わりなさい」、先進国が消費社会と違うモデルを示すということです。しかしこれだけでは、途上国が「脱成長」の方向に進むのか、それとも消費主義的社会に進むのか、それは分かりません。ラトゥーシュは、途上国に対しても「経済成長信仰からの脱却」が重要だと述べています。

消費社会から抜け出すには

「脱成長」は段階を追って、消費社会の仕組みを議論していくのが大事です。その取っ掛かりとして「地域社会をGDP以外の価値の物差で再評価する」「言葉の意味を再定義する」「生産・消費の規模と構造を転換する」「無駄な中間消費や社会的負荷を削減する」など、何が大切かをそれぞれの地域で考えていくと良いでしょう。スペインやフランスでは「脱成長」が高校生を対象に教えられていたり、自治体でワークショップが行われたり、ローカルな運動としてかなり浸透しています。

私たちは未来社会を想う時、期待を込めて描きます。これまでの歴史の中で経済成長は、多くの人にとって右肩上がり社会が進む未来を約束させるものでした。これまで多くの人々が信じてきた「経済成長の物語」と比べると、「脱成長」のシナリオは政策に乗りにくいところがあります。「脱成長」の研究者や実践家は、経済成長はもう実現不可能だと言っています。「脱成長」をした時に私たちの世界が、どういう風にポジティブに変わるのか、その内容をもっとふくらませていかなければなりません。

(会報作成チーム)



参加者の声

- 今の崩壊した世界を見ると、その背景が何だったのかよく分かりました。強い権力に対する力強い市民力が私たちに問われているのだと思います。
- ひたすら意見を出し合う時間を作っていく事。どのような未来でありたいかをそれぞれが考えることしか

アイデアがない。地球規模の革命ですね。

- 地産地消が原点になるのではと思う。小学生で習った輸出大国「日本」の考えが70になっても染みついています。この考えは思想になっているのではない。時間がかかるが教育が最善ではないか。

ネパール
教育プログラム

支援地域はIRM全区に

教育が立ち遅れたインドラサロワール農村自治体 (IRM) における「質の高い教育」プログラムは、皆様の温かいご支援に育まれながら、5年目を迎え、支援地域は、4区、5区から1区、2区、3区と、今やIRM全区に広がりました。開発から置き去りにされた地域の課題を短期間で解決することは難しく、まだまだ課題は山積していますが、初めての理科の実験に興じる子どもたちや、意識改革キャンペーンで教育の大切さに目覚めた女性たちの笑顔の写真やビデオが続々と届いています。

生徒たちの理数系の成績不振は積年の課題です。現地パートナーNGO SAGUNは、専門家による数学と理科の教師トレーニングや、実験を取り入れた理科の模擬授業、サイエンス・エキシビション (発表会) を実施し、教育現場に大きなインパクトを与えました。しかし、教師の離職率が高く、初等教育のレベルがあまりにも低いIRMで教育改革をするには、長期的な活動だけでなく緊急アクションも必要です。子どもたちの将来を決定する国家試験対策のための2日間の理科教師トレーニング



エキシビションで来訪者に説明する生徒たち

ングを行いました。その後、トレーニングを受けた教師と生徒たちの合宿をカリカ中等学校で実施しました。突貫作業で成果をつくることは叶いませんでしたが、このプログラムを通して子どもたちが理科と数学を楽しんでいることに一筋の光を見た気がします。

一方、カウンセリングトレーニングは、一定の成果をもたらしています。私たちが調査でIRMを訪れた時、同じ郡で自殺者が一日に6人も出たという話を聞きました。このような事態を深刻に受けとめ、SAGUNは全5区から教師や養護教諭を集めて、心理社会的問題に対処する訓練を実施していました。後日、国家試験のための合宿でパニック発作を起こした生徒に対して、養護教諭

が適切な処置をとることができたとの報が入りました。

サイエンス・エキシビションに参加したIRMの政策立案者、教師、関係者たちは、これまでと全く違った授業に感銘を受け、新しい教育技術の必要性を認識しました。私たちの教育への貢献が認められたことは、教育向上の新たな一歩といえるでしょう。
(ネパールチーム 乳井京子)

INFORMATION

★地球の木のプログラムは、みなさまの会費と寄付で支えられています

活動日誌 (3月～5月抜粋)

■ 3月

- 7日 ラオスプロジェクト 報告会 (JVC)
- 10日 会報誌98号発行
- 22日 地球の木講座
「カタツムリの知恵と脱成長」
- 27日 ラオス図書ボランティア (報告会)
- 28日 デポー展示会 (鎌倉)
- 30日 第9回定例理事会

■ 4月

- 19日 第10回定例理事会
- 26日 2024年度期末監査

■ 5月

- 11日 第11回定例理事会
- 24日 第26回通常総会

デポー展示会 6月30日 (月) 東寺尾デポー

*** 事務所が移転します ***

地球の木は、2002年9月より活動の拠点をJR関内駅徒歩2分の事務所に置いてきましたが、諸事情により本年9月以降の契約は更新されないことになりました。貸主である稲垣薬品興行様には、長い間ご厚意により廉価で事務所をお貸しいただきました。ご協力に心から感謝申し上げます。移転先は、またお知らせいたします。



ネパール極西部訪問報告書が できました！

ネパール極西部における教育支援プロジェクト (1997～2009年) が終了して16年。今もパートナーNGOのニルマラさん、シュレスタ教授とは交流が続いており、極西部のキーパーソンたちとのオンライン会議で数々の成果を聞いていましたが、ぜひもう一度現地を訪問したい、と有志4名で行って来ました。ずっと応援して下さった皆様に、私たちの蒔いた種がどんな実を結んだかを知っていただきたいです！ホームページに報告書を掲載しましたので、ぜひご覧ください。

